

根来寺の油倉

菅原 正明

1 甕倉の発見

a. 埋甕遺構 和歌山県教育委員会はここ10年間、根来寺山内で発掘調査を行っており、天正13年(1585)の羽柴秀吉の根来攻めの際の兵火の跡を示す焼土や多くの遺構を検出し、坊院の一端を明らかにすることができるようになった。この中で注目すべきものに「埋甕遺構」がある(第1図)。この埋甕遺構は従来「甕ピット」と呼称されてきたもので、これまでに20個以上発見されている。この埋甕遺構は地面に深さ50~60cmほどの穴を掘って大甕を複数数列、あるいは一列に並べて据付けているものであり、中には大甕を地下室に据付けている地下式の埋甕遺構もみられる。埋甕遺構内の大甕のほとんどが備前焼で、大人が一人はいるくらいの大きさがあり(第2図)、肩部外面に窯印と共に式(二)石入とか参(三)石入とかへう書きされている(第3図)。式(二)石入は口径56cm、器高96cmほどで、参(三)石入はその一廻り大きい。数は少ないが常滑焼の大甕と一緒に据付けていることもある。この埋甕遺構は大甕を



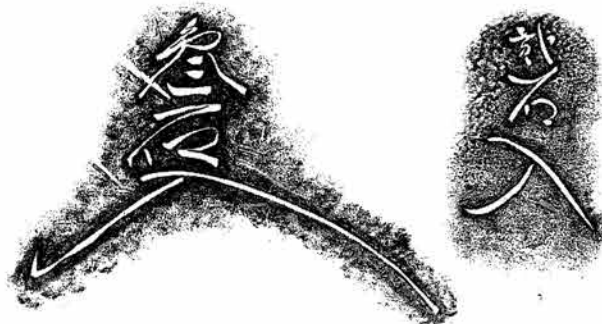
第1図 埋甕遺溝



第2図 備前焼大甕

据付けた建物とみられ、倉として機能したと思われる。ここでは大甕をまとめて倉の土間に据付けている埋甕遺構を便宜的に以下「甕倉」と仮称する。この甕倉の形態や規模には規格性がなくまちまちであることから、各坊院ごとに甕倉を建てたと推定した。

b. 新・旧甕倉 甕倉の遺構には大甕が残存している場合と、すべて抜取られ、その抜取り穴を山土で埋めている場合とがある。前者はほとんどの大甕内、あるいは大甕の抜取り穴の埋土中に焼土や木炭がはいっており、大甕の形式から、天正13年の兵火で廃絶した甕倉跡であると考えられるのに対して、後者は大甕抜取り穴の中には焼土や木炭を含まず、埋戻されているので天正の兵火以前に他の地点に移設されて廃絶した甕倉跡とみられる。前者を新甕倉、後者を旧甕倉とする。この旧甕倉と新甕倉とが同一敷地内で検出されることが多く、新甕倉には15世紀代の大甕を据付けていることもあり、旧甕倉の大甕の多くは新甕倉に移設されたものと推測する。例えば円明寺の東側で行った発掘調査についてみると、昭和55年度にKZ調査区で検出した坊院の敷地では甕倉を北側から南西側に移設しており、また昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した坊院の敷地では同じく甕倉を北東側から南西側に移設している（第4図）。この甕倉の移設はその中の大甕数がほとんど増加していないことから、甕倉の規模拡大のためではなさそうだ。これらの大甕の埋置時期は新甕倉遺構に残存していた最も新しい大甕の形式及び旧甕倉遺構の埋土中から出土した遺物の形式から旧甕倉は15世紀後半に建てられ、新甕倉は16世紀後半に建てられたものとみられる。

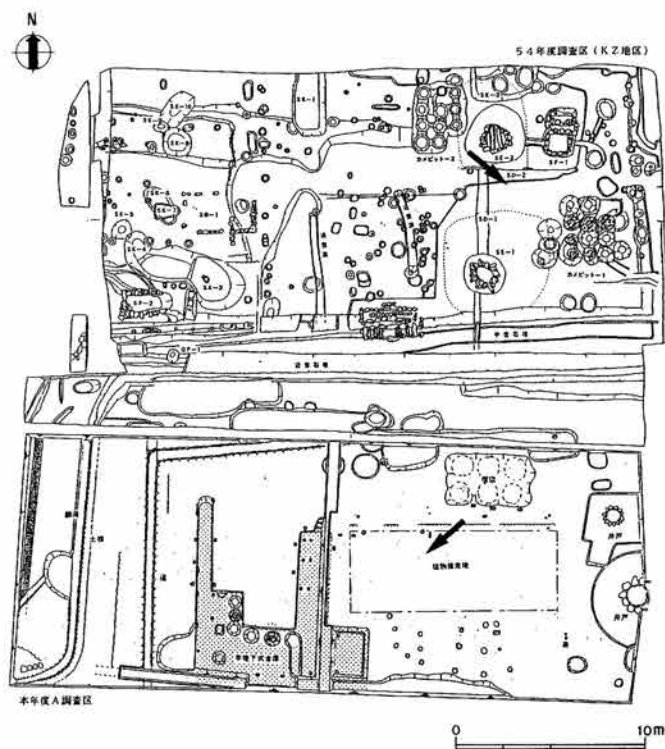


第3図 備前焼大甕の容量

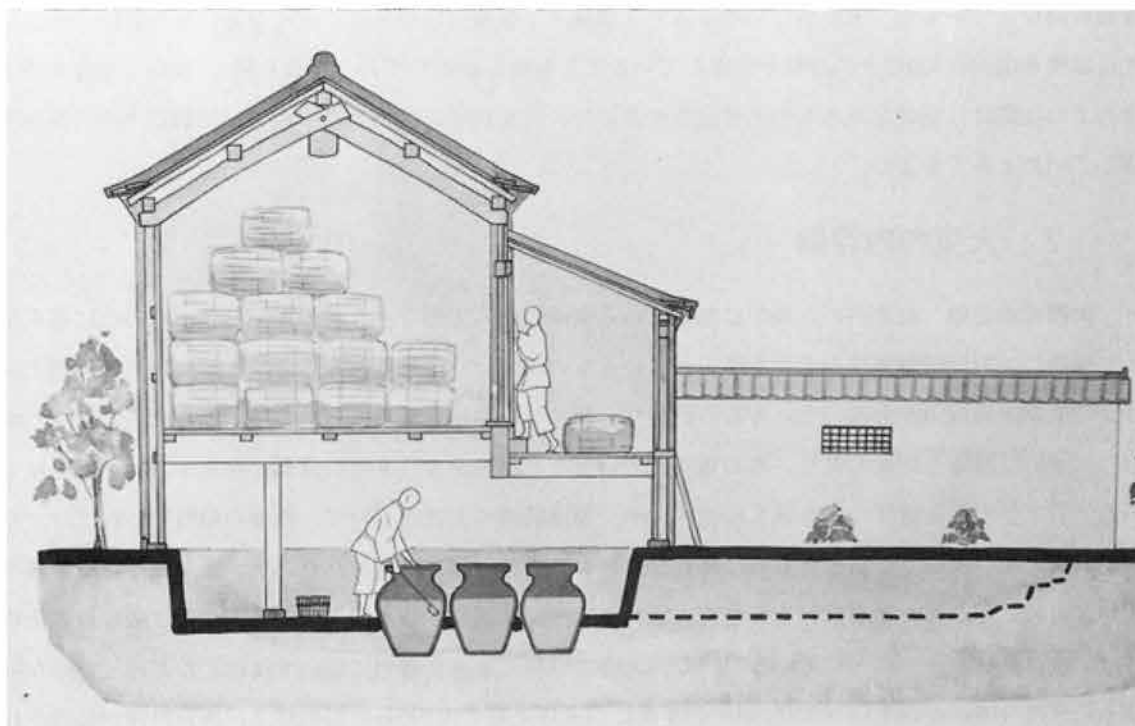
c. 甕倉の構造 甕倉の建物はすでに失われているのでその構造はなかなか把握しにくい。しかし幸なことに、昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した坊院（第4図の南側の坊院）の甕倉SB01は地下式倉庫であったため、その平面形や規模・地下室の様子等の下部構造が明らかで、それに続く上部構造を推定できた。その規模は東西長11.5m、南北幅4m、深さ0.8mで、北面の東側及び西側に角状に突出し

た出入り口が2箇所あり、スロープ状に地下に降りるようになっている。地下室の南寄りの床面に床束の礎石が東西に3個並び、その北側に大甕を7個据付けていた。この地下室の壁は真っ赤に焼けており、また床束の礎石も柱位置は黒くその周りは赤く焼けていた。さらに埋土中から焼けて赤くなったスサ入の壁土や瓦、それに炭化した建築部材の小片や炭化米が多量に出土した。良好に残っている壁土は厚さ20cm以上あり、表面から5cmほど赤く焼けている。また壁土には竹小舞が残っているものもある。これらのことからこの倉は土蔵造り2階建てで上は米倉、地下は甕倉であったことが判明した。鳴海祥博氏にこの倉の復元図を描いていただいた（第5図）。この他に、昭和55年度のI-2次調査区で発見した甕倉は、埋甕を取り囲むように人頭大の石を矩形に並べており、これは土蔵の壁の下基礎地業であり、この甕倉も土蔵造りと考えられる。

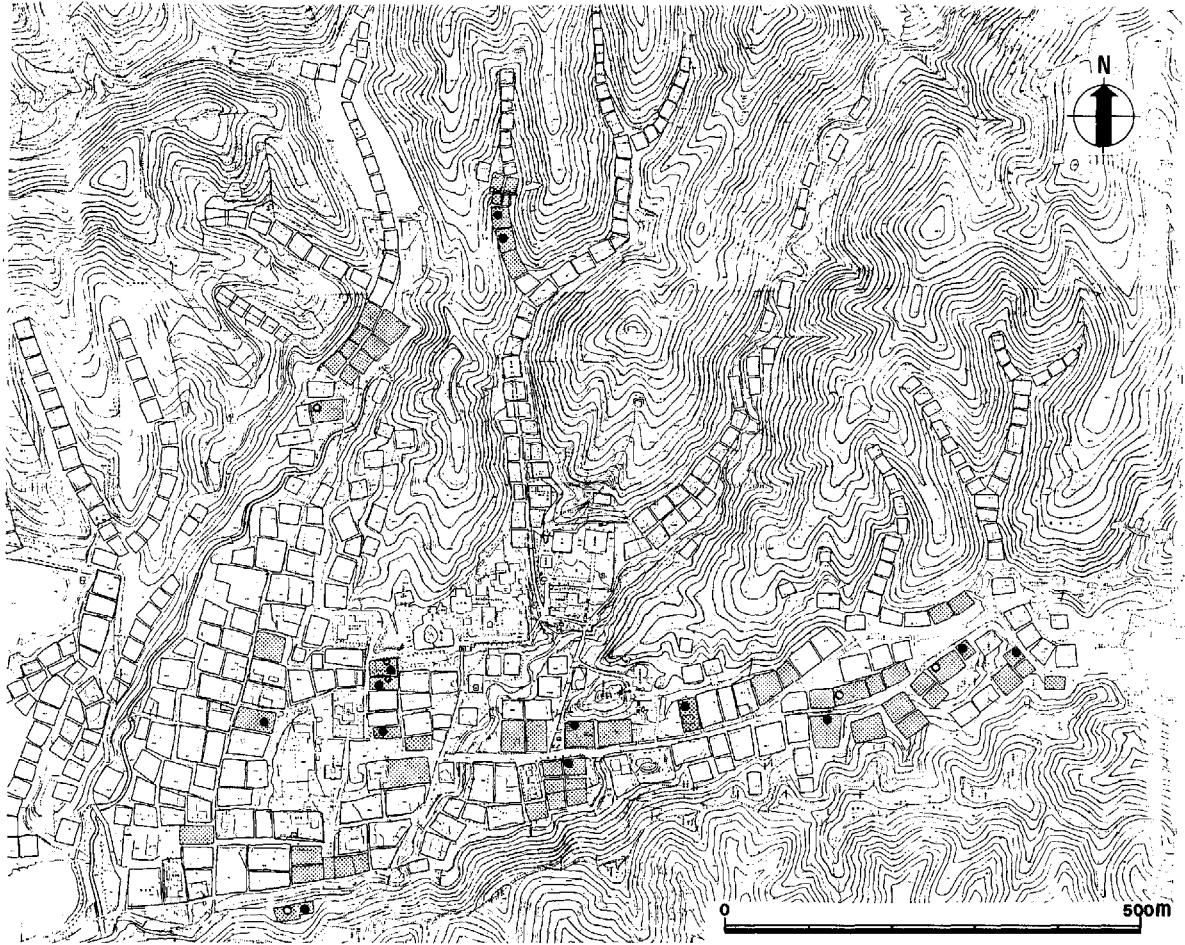
d. 甕倉の大甕数 これまでの発掘結果よりみると、甕倉は各坊院ごとにその建物の形態及び規模・大



第4図 旧甕倉と新甕倉



第5図 倉の復原（米倉・油倉）



第6図 根来寺の坊院と甕倉

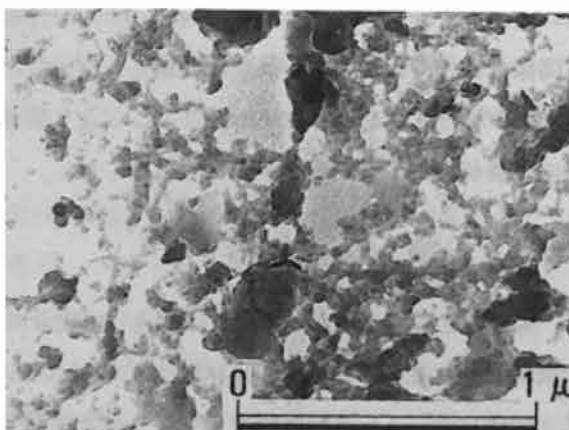
甕数が異なっているが、大甕数は平均すると1甕蔵で7個据付けていたことになる。また先に、天正13年には根来山内に450以上の坊院が存在していることを明らかにしており（第6図）、少なくともその3分の2の坊院には甕倉があるものと推定されるので、天正13年には根来寺全山で2100個以上の大甕を所持していたとみてもよい。

2 大甕の内容物

a. 大甕の内容物 甕倉内の大甕には割れている個所に沿って幅2～3cmの布を貼り、その上に漆を塗って補修し、内容物が漏れ出るのを防止しているものがしばしば見られること、また大亀の口縁部上端および底部内面縁辺が磨耗しているものがあり、柄杓で内容物を汲み出したものとみられることなどから、大甕には液体をいれており、木の蓋をしていたことが分かる。また口縁部に布をかぶせ頸部を紐で結んで蓋としている痕跡のある例もある。従来、埋甕遺構の大甕について、紺屋の染料をいれていたものであるとか、火薬とか酒を作るのに使われたとか、食料の保存に使われたとか、また油や味噌・醤油をいれるのに使われたとか言われてきた。これまでの発掘調査で埋甕遺構の大甕内からは甕倉の廃絶後にはいった遺物が少々出土しているだけで、大甕にいてあったものについてはほとんど残っていない。ほとんど残っていないというのは、昭和62年度に根来寺大塔の南200mに岩出町立民族資料館が建設されることになり、建設に先立って事前の発掘調査を行った際に検出した甕倉の中の大甕内の底から黒色の

タール状のものが検出されたのであるが、担当者が写真撮影の際にこのタール状のものを全部ふき取ったとのことで、現在その資料は残っていない。しかし詳細はこの大甕の内面を観察してみると胴部内面に黒色物が付着していることが明らかとなった。

b. 大甕に付着している黒色物 そこで、これまで出土した多数の大甕に黒色物が付着しているものがあるのかどうかについて再検討した。その結果、大甕の内面に黒色物が付着しているものが多



第7図 カーボンボール

数あることが判明した。この黒色物は大甕の胴部内面や頸部内面に付着していることが多く、それもその上端は水平ではなく波状であり、底部内面には見られなかった（図版の1・2）。この黒色物は薄く付着しているものや厚く膜状に付着しているもの、部分的に付着しているもの、真っ黒く広く付着しているもの、漆膜のように光沢のあるものなど色々みられた。さらにこの黒色物は大甕の内面だけではなく外面にも付着しているものもある（図版の3・4）ことが明らかになってきた。

c. 黒色物の電子顕微鏡観察 大甕に付着している黒色物は大甕内容物と直接関係していると考えられた。この黒色物は肉眼観察によるとススのように見えるので、通産省大阪工業試験所の藤井禄郎・池田茂氏にこの黒色物を電子顕微鏡で撮影していただいたところ、カーボンブラックやカーボンボールが観察され、この黒色物が炭素であることが判明した（第7図）。とすると、なぜ大甕に炭素が付着したのか、またこの炭素が大甕に内容物といかなる関係にあるのかという問題が浮かび上がってくる。根来寺が天正13年に羽柴秀吉の焼討にあい、伝法院の建物と南大門のみを残してすべて焼失しているので、この時に甕倉も焼け、大甕の内容物が炎上し、大甕に黒色物が付着したとみて間違いはあるまい。ただしすべての大甕内面に黒色物が付着しているわけではなく、大甕内容物が焼けた際の温度により、ススの付き方が異なり、低温度の場合はこの黒色物が埋土と一緒にとれたり、発掘後の水洗いで流れたこともあろう。このようにみてくると大甕の内容物は燃える液体、つまり油であった可能性が最も高い。この大甕にいていたものが油であるとする、この油は中世の油座関係の文献の検討から、燈明に使われた燈油とみられる。

d. 黒色物に含まれる有機物 大甕内面の黒色物は燈油が燃えて付着したものであるとすれば、黒色物に完全に炭素に成り切らない有機物が含まれているものと考えられる。この黒色物に有機物が含まれているのかを確認するため、黒色物の付着している大甕破片をベンゼン（ C_6H_6 ）を用いて超音波処理し、有機物が析出するのかどうかを観察した。そのいくつかから有機物が析出し、薄黄色あるいは薄茶色に変わったので、この黒色物の中には有機物を含むものがあり、ベンゼンに析出したことが分かった。

e. ゴマ油の燃焼実験 以上見てきた黒色物の分析とは別に、素焼きの鉢にゴマ油をいれ、これを燃やしてみた。ゴマ油は常温では火を付けてもすぐには燃え上がらない。しかしこの油から灯芯をだして（油の表面積を大きくする）、それを火を付けると、灯明としての明りをとるぐらいは燃えるが、全体としては燃え上がらない。しかし油の温度を沸騰するくらい上げて火を付けると油はぱっと燃えあがり、真っ

黒い煙がもうもうふきだし、鉢の内面にススが付着した。このススの付着した状態は大甕内面の黒色物と同様であり、大甕の中の油全体が燃えあがったということは、大甕内の油が沸騰するくらい甕倉の温度があがったことを示している。このことより甕倉が火事になり燃えあがり、倉全体が高温になり、大甕の燈油が勢いよく燃え上がったと推測した。

3 油 倉

a. 油倉炎上 ゴマ油の燃焼実験に関連して甕倉の遺構についてみると、昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した土蔵造りの甕倉SB01は火事で焼けており、地下室の壁が真っ赤になり(図版の5)、床面も一部赤色化している。さらに床束の礎石も赤色化していることなどから、この甕倉が焼けた時に地下室も燃えたものとみられる。壁土の赤色化については上屋の部材が燃えて落下して地下室が焼けたにしても、特に地下室に燃えるものがなければ、このように壁や床が赤色化することはなかろうと思われる。土蔵造りの甕倉の焼亡は類焼というよりも内から燃えた可能性が高い。このことは大甕に燃える液体がはいっていたことを示すものであり、先の検討より、大甕には液体がはいっていること、大甕内の黒色物はススであること、さらにこの黒色物から有機物が析出されていることから、この地下式甕倉の大甕の内容物は燈明に用いる燈油で、根来寺の甕倉は油倉とみられる。しかし根来寺の甕倉がすべて油倉であるとは断定できないが、根来寺山内にある各坊院がこの大甕で何かを生産していたとは考え難く、大甕の内容物は同一のものとみてもよいのではなかろうか。

b. 叩き割られた大甕 天正13年の根来寺焼討の際に、新甕倉の大甕の多くは焼ける前に叩き割られ、また引抜かれている。昭和62年度にNG87-2B調査区で検出した地下式甕倉SB02の場合、大甕を3個並べて据付けていた抜き穴があり、その内2箇所穴の中に大甕の口縁部がひっくり返されており、また抜き穴の壁が焼けた状態で検出された(図版の6)。この付近に口縁部以外の破片が散乱しており、特に厚さ2～2.5cmの厚い底部は細かく割れていた。これらの破片はすべて接合でき、完形なり、さらに胴部外面にススの付着しているものもあり、甕倉が燃えたときには、この大甕は引抜かれていたことを示す。大甕が引抜かれたり、叩き割られた理由はどこにあったのであろうか。備前焼の大甕の場合40～50日間も連続して薪を大量に使い焼成したといわれており、きわめて高価であったとみられるので、この高価な大甕をこれほど大量に購入していることは、その数以上に、その中に貯蔵していたものは、さらに高価なものとななければならない。秀吉が大甕を徹底的に破壊していることは、根来寺が再びこの大甕に燈油を蓄え、巨大な富を得ることを恐れたために相違ない。

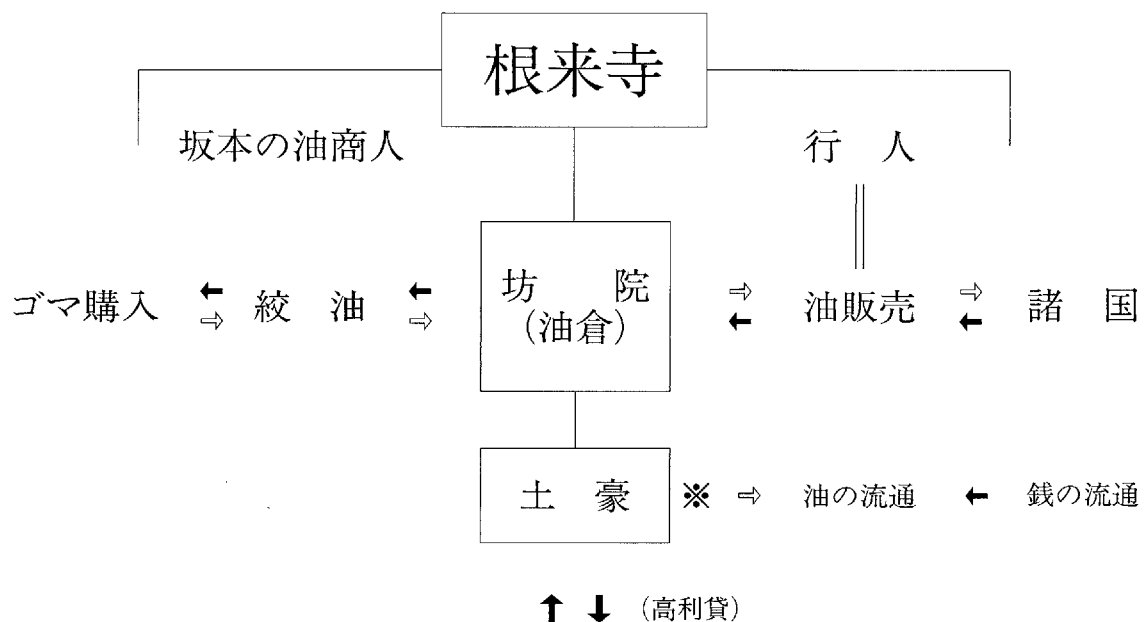
c. 大甕の容量 甕倉出土の大甕の多くが備前焼の二石入であるが、中には三石入もみられる。堺環濠都市遺跡出土の備前焼大甕二石入(16世紀後半)2個の容量について藤木卓次・奥村一憲氏が電子計算機で体積計算を行い、その容量は311.441ℓ～379.674ℓであることを示しており、1石は180ℓであったものと思われる。すべての大甕に燈油が一杯はいっているとは限らないが、仮に二石入の大甕に燈油が3分の2はいっていたとすると、根来山内に天正13年に貯蔵された燈油は、1大甕に1.3石(234ℓ)はいっており、1甕倉が平均7個の大甕をもち、この甕倉が根来全山で300棟以上あると推定されるので、燈油の総容量は2730石(491400ℓ)以上で、これを銭に換算してみると(天正年間に紀州では燈油1升が150～200文)4～5.4万貫以上にもなる。ちなみに、平安時代の例ではあるが東大寺全山が1年間に使用

した燈油は「年料油 6 斛四斗八升五合」（『延喜式』主税上）であり、また高野山大伝坊院が治承 2 年(1178)に「常燈並臨時恒例御明料」（『根来要書』下）としてあげていた燈明は年間 5 石である。とすると、根来寺の 1 坊院の甕倉ではその 2 倍以上の燈油を貯蔵していたことになり、いかに膨大な量の燈油を根来寺が貯蔵していたのかを知るのである。

d. 燈油の生産と販売 根来寺の各坊院の油倉の燈油の貯蔵量は自己消費にしては多すぎるので、この灯油を元にして商売をしていたものと考えられ、根来寺にはこの燈油を販売する機構があったものとみなければならない。燈油は水のようにどこからか汲んできたのではなく、燈油の原料となるゴマを入手し、それを絞油し、この燈油を各坊の甕倉に貯蔵し、そしてこの燈油を諸国に売り捌く販売網が完成していたとみられる。そこで燈油の製油から販売までの流通過程を江戸時代の例をとってみると、以下のよう機構があることが分かる。この中で坊院が直接関与していたのは燈油の貯蔵だけであった。

- 1 ゴマ栽培 → 2 購入（種物問屋） → 3 絞油（絞油業者） → 4 貯蔵（油問屋） → 5 販売（油屋） → 6 消費者（燈明）

e. 坊院の燈明 根来寺の坊院がいかに燈明を貯蔵し、また販売していたのかについて記している文書は皆無である。そこで、発掘結果からどんなことが考えられるのか検討した。先に行った甕倉の大甕の検討より、大甕には燈油が貯蔵されていたと推測したのであるが、これに関連し坊院内からは絞油関係の遺構（ゴマを炒りまた蒸すヘツツイや炒りゴマを粉碎する唐臼・油を絞る長木などの遺構）は検出されず、坊院内では絞油は行われなかったと思われる。とすると各坊院は油倉に燈油を貯蔵し、それを販売していた可能性が高い。つまり各坊院は甕倉を建て、大甕を入手するなどの資本投下を行い、その製油・絞油を坂本の油商人に行なわせ、この油を販売して利潤を得ていたと推測されるのである。



f. **坊院の経済** 根来寺の行人方の多くが紀伊国・和泉国の国人・土豪層の弟子であり、山内に坊院を建て（和泉国熊取庄の中家一成真院、紀伊国那賀郡小倉の津田氏一杉ノ坊、紀伊国海部郡雑賀の土橋氏一泉識坊、紀伊国名草郡岩橋の湯橋家一威徳院、和泉国佐野の藤田家一西藏院など）、宗教的権威を背景に根来寺と郷村の名主層とが強く結びつき、地域的政治権力を結集させ、和泉国・河内国の荘園領主に對する高利貸活動・加地子田畑の集積を展開したといわれている。このような根来寺の経済基盤は燈油で得た資本を元にしていたとみられる。

4 根来寺の発展

根来寺は格別に裕福であったことを示すことにより、その経済基盤が他の諸寺院を圧倒するほど組織だった強力なものであったことを逆に示したい。15～16世紀の根来寺の興隆状況についてその具体例をあげる。

- 1 坊院が各谷間の奥にまで進出するのは15世紀中頃からであり、16世紀後半に最大に達し、その総数は450を超えている。
- 2 甕倉（油倉）が建てられ始めるのは15世紀後半からであるが、16世紀後半にその数が最大になっている。この甕倉（油倉）の大甕の中で最も多い形式は16世紀後半に所属するものである。
- 3 16世紀後半には坊院の日常食器のほとんどが中国製の陶磁器で占められており、出土焼物の中で輸入陶磁器が30%を超えている。この中で染付と白磁が多い。こればかりでなく漆器が多用されており、都や城館出土の食器と比べて勝るとも劣らない。
- 4 根来寺は天正13年の兵火により廃寺同然になり、根来で育ち、技術を身に着けた大工たちの多くも生活の場を失った。しかし鶴衛門・吉衛門・刑部左衛門・堀内は豊臣秀吉の信任の厚かった高野山の僧、木食応其を介して、各地の寺社や霊廟の造営に携わるようになったらしい。また平内氏は鶴衛門とともに江戸時代には江戸幕府の大棟梁となり、日光東照宮をはじめ幕府の大造営に関与した。建物を飾る彫刻の技術こそ、根来寺の大工が中央権力に受け入れられ、桃山建築の華やかさを支えた大きな力であったと思われる。根来大工が実力を蓄えることができたのは根来寺の豊かな経済基盤に支えられたからであろう。
- 5 ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの『日本史』によると根来寺は「彼らの寺院なり屋敷は、日本の仏僧（の寺院）中、きわめて清潔で黄金に包まれ絢爛豪華な点において 抜群に優れ」ており、また「これらの建物は日本に於てみるべき最も壮麗なるもの」と記録している。さらに『日本西教史』上は「寺院ハ杉、糸杉ノ材ヲ以テ造リ、恰モ宮殿ノ如シ、大堂美室ノ内ニハ、珍器名画ヲ列ス」とも誌されており、これらは発掘成果からみるとあながち誇張した表現とも言えない。
- 6 根来寺の南の前山には土塁や櫓・堀切りなどの砦のような施設が築造されており、行人は鉄砲で武装し、根来寺の巨万な富を守っていたと考えられる。ルイス・フロイスによれば「彼らは軍事にはきわめて熟達しており、とりわけ鉄砲と弓矢にかけては、日頃不斷の訓練を重ねていた」という。根来寺坊院跡の発掘で山内の各地から表面が白色になった鉛の鉄砲玉や鉄砲の原料となる鉛の延版が出土している。
- 7 秀吉の根来攻めの直前に、根来寺から高野山へと逃れ、のちに京都の智積院の能化第三世となった

日誉僧正は『根来破滅因縁』で「下地富貴安楽ノ寺成ハ、財宝満々テ在之故、諸軍物取ニ心掛ル」と記し、根来寺の豊かさを指摘している。

このように中世にまれにみる急成長を遂げた根来寺の繁栄は、莫大なる富の蓄積なしには達せられなかったであろうと思われる。この根来寺の興隆の基盤は灯油を元にし、それを運用する経済機構にあったとみることにより理解できるのである。

註

- 1 和歌山県教育委員会『根来寺坊院跡』1980～1988年、菅原正明「埋もれた中世の根来寺」（『根来寺展』1988年）
- 2 上田秀夫「51年度の調査」8頁（『那賀郡岩出町根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』1978年）
- 3 武内雅人「KZ地区の調査」55頁（『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ』1980年）
- 4 村田 弘「中世の遺構」9頁（『根来坊院跡 昭和62年度』1988年）
- 5 菅原正明「根来寺の変遷」42～45頁（『根来寺展』1988年）
- 6 上田秀夫「51年度の調査」図版第3（『那賀郡岩出町根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』1978年）
- 7 小野正敏「越前一乗谷における町家について」812頁（『論集日本原史』1975年）
- 8 上田秀夫「根来寺の遺構と塔頭の構造」25頁（『シンポジウム一乗谷と中世都市』1986年）
- 9 白井洋輔「備前焼年銘入大甕の時代的特徴」69頁（『岡山県立博物館研究報告5』1984年）
- 10 毛利哲夫「三木城発掘調査」54頁（『三木市埋蔵文化財調査概報一昭和50年度～59年度一』1986年）
- 11 水野正好「主要文献解題」320頁（『発掘が語る日本史』4 近畿 1987年）
- 12 杉本 宏「宇治市街遺跡第2次発掘調査概報」7頁（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第8集』1985年）
- 13 大甕にもし油がはいっていたとすれば脂肪酸が検出されるものと思われたので、残留脂肪酸の分析を依頼しているが未だ正式な分析結果を得ていない。中間報告によると、甕倉の発掘所見と大きく異なり、油が火事で燃えたときの変化やその後の劣化、及び埋没地層との関係などさらに細かな分析が必要であると思われるので、今後慎重に見守ってゆきたい。
- 14 豊田 武「油座」154～157頁（『座の研究』1982年）
- 15 村田 弘「中世の遺構」18頁（『根来坊院跡 昭和62年度』1988年）
- 16 野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告一車之町東1丁 SKT21地点一」注記15-3 511～512頁（『堺市文化財調査報告第20集』1984年）
- 17 津田秀夫「燈油」211～220頁（『講座・日本技術の社会史 1 農業・農産加工』1987年）
- 18 福尾猛市郎「戦国期根来寺の大名領主性について」39頁（『広島大学文学部紀要12』1957年）、三浦圭一「根来寺と和泉熊取の中家」361頁（『中世庶民生活史の研究』1984年）
- 19 村田 弘「根来寺坊院における焼土出土遺物とその組成」162頁（『貿易陶磁研究No.8』1988年）
- 20 内藤 昌「豊臣秀頼の大工」・「伊達政宗の大工」・「徳川家光の大工」『近世大工の系譜』1981年、鳴海祥博「根来寺の大工」56～57頁（『根来寺展』1988年）



1 大甕内面の黒色物



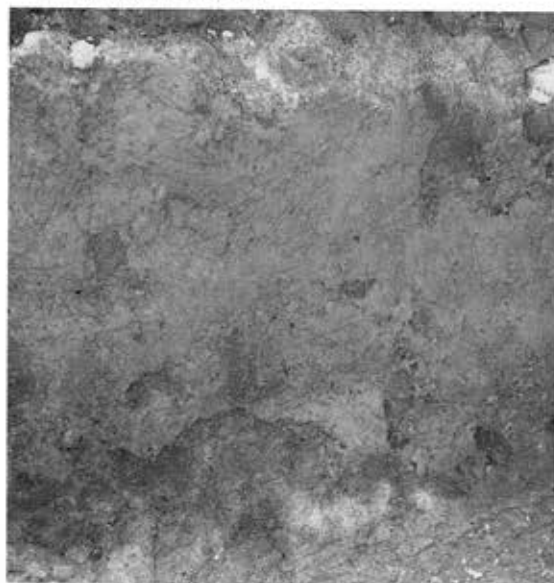
2 大甕内面の黒色物



3 大甕外面の黒色物



4 大甕外面の黒色物



5 赤色化した地下室の壁



6 引抜かれ、叩き割られた大甕